



寂しがり屋の親友の睡眠姦★お試し版

意馬心猿

【登場人物】

主人公…ナシヤル♀

黄緑色の髪、草色の瞳。

男まさりな悪ガキ時代をトピアと共に過ごすが成長するにあたって雰囲気や自分の身体に違和感を感じ困り歪んだ思春期を過ごす。

一人称、私。

お相手…トピア♂

短髪朱髪、銅色の瞳。

幼なじみ。世間的には優秀な騎士。内に秘めたるは変態屑の資質。

一人称、俺。 私（外面）

モブ…蜂蜜屋のミミ

一人称、アタシ

モブ..神父

トピアの祖父。町の慕われる神父。

モブ..護兵三人

若者二人と中年一人

モブ..伯父、両親

話題で出てくるのみ

隣の夫婦と私の両親は子供の頃から仲良しで、産まれた子供の私達も自然とその輪の中に収まった。四歳年上のトピアは、頼れるお兄さんかといったら全然そうではなく、一緒にイタズラばかりをする悪友だった。頭が良く体力のあるトピアは、毎日毎日、いらぬイタズラを考え。まあまあ、魔力をもつ私はそれに便乗して実行する。やる内容といえは、本当に下らないことばかり。

例えば禿な神父の素朴なカツラを彼に感付かれることなく色鮮やかに取り替えるとか。

根暗で陰気臭いと街から煙たがれる魔法使いの家に蛍光の塗料を施し夜中眩しくさせるとか。

飲酒中毒で騒ぎばかりおこす男の酒瓶を一カ月間、執念深く蜂蜜に取り換え

るとか。

王都から休暇に来た傲慢貴族男の独特過ぎるキツイ香水を全部、果実水にするとか。

そんな、ことばかりをしていた。

私が使える魔法といえれば数十分そこら透明になれる（体調によって時間の差異がある）。

自分達の気配をかなり薄くできる（虫ぐらい）。

妄想力の感情を高める（相手も可、幻影とは違う）。

と、この三つのみで珍しいけど魔獣と戦う為の通常攻撃に必要な火・水・風・土などといったものが一切ない。

一応この能力、光と雷の混同とはトピアが教えてくれたが、だったらそれ系の攻撃魔法、せめて夜道の電灯になって欲しかった。

しかし、この魔法、身体能力がずば抜けて高いトピアにかけるとえらく有能

な感じに發揮する。カツラ取り換えなんて、お茶の子さいさい。突風を身体能力のみで吹かし透明なまま俊敏な動作で風力で浮かび上がったカツラを色鮮やかな物と取り替える。

その時間差、ほんの一秒たらず。

私はその間、神父の妄想力（集中がそちらに向かう）を上げて、透明化したトピアの気配を虫並みする。終わると、後はカツラにざわつく教会から堂々と逃げていくのだ。

終わった後は、蜂蜜屋の蜂蜜氷菓子で乾杯。

そんな自他共に認めるクソガキな私達は、クソガキなりの純粹さで生きていた。

「輝く魔法使いの家！」

「まっぶしいー！」

蛍光の塗料を魔法使いの家に塗り付け美的感覚を上げた私達は大いに汚れて

いた。その日の決行は両親にバレないように家を抜け出して行い。そのまま帰ってしまおうとバレバレなので何処かで洗い流す必要性があった。

トピアは魔力の容量は私に劣るが良い感じに四属性は使う事ができる。近い森内の小川が流れる場所で土魔法と火魔法で簡易の桶を作り水を入れて温め。服を脱ぎ捨て二人で浸かる。トピアが優秀な如く用意していた石鹼を使いお互いの身体を泡吹かせた。

擦りの延長戦で笑い転げながら互いを綺麗にした、それで感覚が麻痺したのかも知れない。

あの日から定期的に一緒にお風呂に入る事が増えた。

遊びの延長戦で特に疑問も抱かず回数は増え。ほぼ毎日になった頃、トピアに騎士団入団試験のお誘いの手紙が来た。試しにと受けた試験は即、受かり、トピアは入団に、どこか少し渋っていたが結局は周りからの応援もあり入団する事を決める。

私は、その時、少しホツとしていた。

身体が成長するにあたって何か不可思議な感覚になり始めていたからだ。トピアの事は大好きだが一緒に風呂に入る事が避けれず内心困っていた。だから嫌がっているとかわず悩む事が無くなるのが嬉しかったのだ。

トピアが半日で行ける距離だが、それなりに離れている王都の騎士団寮へ行く前の最後の夜。何時も通り共に湯船に浸かった。

「……」

「……」

その頃の私は成長で膨らみだした自分の乳房が嫌だった。トピアの形と違う。異質な感覚が、どうにも許せない。そんな風に自分の乳房に対して感じていた。

「ナシヤル」

「……なあに？」

今日は、しみりとした気分なのか無言で目が合うだけだったトピアが呟い

て言葉を返す。

「今夜は一緒に寝ても良い？」

湯に濡れた短髪の朱髪から雫が落ち、銅色の瞳が艶めいて揺れている。

「え、えっと」

「寂しいから」

ドキツとした。

寂しい。

ゴクツと喉が鳴る。

その言葉を、トピアが言うなんて思っていなかった。

「……うん。いいよ」

肯定すれば彼の瞳が嬉しそうに緩み微笑みを見せた。最近、成長して抜けつつある幼い顔つきが僅かに見える。

——……トピア寂しいんだ……

悪友兼、親友が離れるという事実。その事柄を漸く、その言葉で認識した気がした。友が離れていく。私の親友は明日から近くに居ない。

——……お風呂は、どうしようってなってたけど……私も……寂しいな……でも、トピアは、もつと、だよね……

明日からは深い知り合いが居ない場所に行く、トピアの事を考えると胸の内側が、きゅつとした。

ナシヤルの部屋に隣接する建物の二階窓から、するりと枕を持って入り込ん
で、にっと笑う寝間着姿のトピア。湯冷めする前にとナシヤルは掛け布団を開
け手招きして同じ寝台の隣に横にさせる。灯りを消している室内は暗い。

ごそごそ。

トピアは無言でナシヤルの背後から腕を回しお腹に手の平を当てた。ぴった
りと、くつついて寝間着越しに感じる体温と、お腹の手の平が温かいなっと思
いながらナシヤルは眠りにつく。

カチ、コチ。カチ、コチ。

時計の針の音。静かな部屋。外からは木々が風に吹かれ家が小さく軋む。

「……ふ、う……っ」

布の擦れ合う音に混ざって人の吐息。その吐息が少し苦しそうに聞こえた。寝起きで頭が、ぼーつとする。身体が汗ばんでおり瞼が、ゆっくりと開いていく。暗い部屋の中は慣れた自分の部屋の筈なのにナシヤルは違和感を感じた。

——……ね、む……あつ……

熱くて身じろぐ。何か背中に、くっついているモノが熱いのだ。

——……なあ、に……？

動いても上手く外せない。かけぶとんと毛布が絡まったのだろうか。時折、

起きていると思っても夢の時がある。そういつた時は何度、布団から出ようと
しても身体が思う様に動かず起きれない。

——……めん、ど……

汗が滲むが我慢できない程ではない。繰り返す夢の無謀さが面倒で、ナシヤ
ルは眠っている筈なのに眠る事にした。

「……はあ、あ……っ」

うとうとと夢の中に入っていく。

「……で、る……っ」

何かが寝間着の上から、お尻の下側、太股の上側に入り込み湿気を生む。

——……おて、あらい……いかなきや……

ナシヤルは心の中で排泄への思いを抱いたが、そのまま静かに眠りについてしまったのだった。

私は朝になり何か忘れているような気がしたが元気なトピアを見送り、その後は二年ほど戻らず。三年目からは定期的な休暇の時に帰ってくる彼に会うだけで距離が確実に生まれていった。戻ってきて当初は湯船に共に入ろうとしたので勇気を出して確りと断る。

「もう、大人だからダメ」

「ええく……」

脱衣所で服を脱ごうとしていたトピアの大きな手を掴み止めて言えば膨れて不満そうにしながらも出て行ってくれた。私はホツとして湯船に浸かった。気にしすぎだったのだ。良かった。これで不思議な感じは、もう無い筈。

「よお、ダーリン」

隣接する窓を開けて僅かな距離から、こちらの部屋に顔を向けながら、そう言葉を放つトピア。夜風が少し気持ちいい。

「え、何、もう寝るんだけど、ってか、誰の名前？」

「親しい人を、こう呼ぶって隊長に教わったの」

「ふーん？ なあにダーリン？」

「ふはっ、いや、うん。やっぱりナシヤルって呼ぶよ」

「へんなの」

窓越しのトピアが部屋に灯りも点けずに黄昏ている。何か悩み事だろうか。

「……騎士団って大変？」

「うーん。まあ俺、こう見えても優秀だから内容自体は、そこまでかな」

「ふーん。凄いじゃん」

「うん……でも寂しいんだよね」

「……」

「ここが王都から比較的、近い町でも月、一、二回にしか帰れないし時期によっては忙しくて全くって日も」

「ふーん……」

「ええ……もつとこう悲し気な親友に興味もつてくれよ」

少しトピアの頬が朱く目が潤んでいるような気がする。私は窓越しに手を伸ばして、トピアの頭を撫でてやった。

「よしよし」

「……つう」

「え、痛かった？」

慌てて手を離せば、トピアが片手を上げ私の手を握って促してくる。

「もっと」

「はーん？ 仕方ないなあ……」

トピアが満足するまで、その夜は頭を撫でて、あげたのだった。

続きは本編で！

寂しがり屋の親友の睡眠姦★お試し版

発行日 2021 年 6 月 4 日

著者 意馬心猿

<https://www.pixiv.net/member.php?id=8224911>

Generated by pixiv

本書を無許可で複写・複製することは、禁じられています。
